

【ボランティア活動補助金】

神奈川リフレッシュプログラム

福島子ども・こらっせ神奈川

ここに注目！
リフレッシュプログラムを通じて子どもたちだけでなく、一緒に働く学生ボランティアも共に成長する姿を見守っている。



自然体験での一コマ

団体の活動内容

①主に檜葉町の子どもたちを対象にした夏休み期間中のリフレッシュプログラムの実施。

プログラムを準備するために、ボラ

ンティアをしてもらえる大学生と実行委員会を立ち上げ、ボランティア研修、福島の子どもたちが直面している問題についての勉強会、現地視察などを実施。

②「こらっせユース」の大学生が春休み、夏休みに檜葉町が運営する学童保育の応援に行っている。同時に檜葉町の震災や原発被災を理解する体験学習も実施。

③プログラムおよび学童保育に関する活動報告書及びニュースレターの発行による情宣活動。

④文科省などの関係省庁と「移動教室」の実現・子どもたちの健康問題をテーマにした交渉の実施。

⑤檜葉町の高齢者が制作するさまざまな植葉グッズの販売を通して福島のことを伝える活動。

活動を始めたきっかけ

3・11の衝撃の後、私たちは放射能で汚染された大地を、海を、そして大気を、次の世代に渡さなければならぬ自分たちの世代を恥じたのではない

かと思う。私たちの多くが、福島の原発で作られた電力を無自覚のままに神奈川で使ってきたのだ。

私たちが一番心配したのは、被曝による子どもたちの健康。原発事故による放射線被曝は、数十年数百年もの長期に渡って続く。低線量であっても、成長期の乳幼児、子どもには危険が大きく、チェルノブイリ原発事故の経験に学ぶならば、きわめて長期間の健康調査と被曝対策を実施していかなければならないことは明らかだ。低線量地域に生活せざるをえない子どもたちには、計画的な保養プログラムを実施することが必要である。一定期間、安全が確保された地域に生活の場を移すことは、心身のストレスを発散させるとともに、免疫力を回復させる効果が期待できると実証されている。

生活クラブや市民運動の活動家、教員、大学教員、公務員、NGOスタッフなど、さまざまなバックグラウンドをもちながら同じ志を共有する仲間たちが集まり、議論を重ね、長期間にわたり「原発被災」にさらされる子どもたちの未来に、プログラムを通して向き合っていくことを考えた。

補助金事業の目的・内容

補助金事業の「神奈川リフレッシュプログラム」は、被災と被曝の不安の中にいる福島の子どもたちを、神奈川に招待してリフレッシュしてもらおうというのが当面の目的だが、将来的には学校ぐるみで一定期間福島を離れて生活し学ぶ「移動教室」を、行政と協力して実現することを目指している。

私たちはプログラムを実践することで「移動教室」のモデルを作ろうと考えた。親子ではなく子どもだけを招き、プログラムの内容は学習と保養を組み合わせ、大学生スタッフが子どもたちの世話をするようにした。

同時に、①特定の地域、できれば同じ学校の子どもたちを招く、②送り出し側と受け入れ側行政との関係を構築するという目標を立てた。

幸いにも檜葉町のサポートを受け、檜葉の子どもたちを受け入れ、県内での実施場所である山北町の行政にも全面的な協力をいただいている。

また、「移動教室」の制度化を要請する手始めとして、福島県外での保養グループに国から補助金を供与することを、省庁交渉を通じて要請した。その結果、条件が厳しすぎて実際には使えないという難点はあるものの、平

成26年度から3億6千万円の補助金
 ができるようになった。補助金予算の作
 成にあたり、「こらっせ」のプログラ
 ムをモデルのひとつとして、文科省と
 福島県が参考してくれたと聞く。

補助金事業の成果・効果

2015年度で4回目を迎え（補助
 金事業としては1回目）、2015年
 8月に、山北町丹沢荘を会場として予
 定どおり実施。参加した子どもたちは
 檜葉町の子もたちを中心に福島っ子
 23名、山北町三保小学校生徒16名、学
 生ボランティア12名、事務局スタッ
 プを含む市民ボランティア14名、教員ボ
 ランティア7名等が加わった。

プログラムの前に、ニュースレター
 発行、賛同金集め、学生ボランティア
 研修・学習会・現地視察、キックオフ
 ミーティングの開催などを行った。山
 北町での3日間は、川遊び・ウォーク
 ラリー・キャンプファイアーなどの自
 然体験、夏休みの学習に取り組み、4
 日目の最終日には横浜市内散策を行っ
 た。子どもたちには、神奈川県内の大
 学生が世話をしてくれた。

また、プログラムを重ねていくうち
 に、体験を通じて子どもたち・学生ボ
 ランティアが成長する姿を目にし、

「交流」は「生きる力」を育むと実感。
 2016年度は山北町三保小学校の全
 生徒がプログラムの一部に参加して
 くれた。山北町教育委員会、学校、PT
 Aの協力があって実現したものである。

「交流」により多くの方々を知り合
 い、助けられ、また、一緒に働く「若
 い力」から元気をもらい、活動のエネ
 ルギー源となっている。

見えてきた新しい課題

3・11から5年半が経過し、甲状腺
 がんとその疑いが172名と報道されな
 がらも、子どもたちの健康問題への世間
 の関心は薄れつつあり、私たちのよう
 な民間グループは財政・人的資源など
 の問題を抱え、存続の危機にさらされ
 ている。子どもたちの被曝の問題にか
 かわる活動を、細く長く継続していく
 ためには、

- ① 持続可能な財政
 - ② 若い担い手の育成
 - ③ 現状に対応した企画
- 以上、3つの条件が必須。

今後は、現在ある神奈川の保養グル
 ープのネットワーク・「いのち神奈川」
 の仲間との協力的体制をさらに密にし、
 国による「移動教室」の制度化、子ど
 もたちへの健康調査・甲状腺検診の実

施などを、一緒に考えていきたい。
団体からひとこと

神奈川県が福島の子もたちを対象
 にした私たちのリフレッシュプログラ
 ムに補助金をだしてくださったことは
 行政との関係を構築してプログラムを
 実施するという私たちの目標の一步前
 進。

このささやかなプログラムを通じて
 さえも見えてくる福島の矛盾は、解消
 されるどころか地の下にもぐりはじめ
 見えにくくなってきている。矛盾を可
 視化し、「フクシマを忘れないでほし
 い」という福島の声を聞き続けていく
 ためには、民間と行政、そしてなによ
 りも若い世代とのコラボが重要だと感
 じる。



遊んだ後はしっかり勉強もね

[事業名] 神奈川リフレッシュプログラム
[実施主体] 団体名：福島子ども・こらっせ神奈川
 設立：平成24年4月
 代表者：山際 正道 担当者：遠野 はるひ 会員数：14人（平成28年10月時点）
 住所：〒235-0016 神奈川県横浜市磯子区磯子7-5-1-509
 E-mail：info@korasse-kanagawa.org
[実施年度] 平成27年度
[総事業費] 1,924,232円（1年間）うち補助金交付額：900,000円
[事業内容] 福島県の子もたちを神奈川に招き、リフレッシュプログラム（学習・交流・自然体験等）を通じて
 成長に寄与する。
[実施実績] 平成27年度リフレッシュプログラム参加者（平成28年8月3日～8月6日）
 福島県檜葉町からいわき市などに非難している小中学生23人（小学生20人、中学生3人）
 山北町三保小学校の全生徒16人、山北町教員7人
 市民ボランティアスタッフ14人、学生ボランティア12人

【ボランティア活動奨励賞】

福祉バイオトイレカーによる

障害者の外出支援及び啓発活動

特定非営利活動法人 やさしくなろうよ



障がい者スポーツ大会にて

主な活動内容

当団体は、障がい者用トイレがない、または不足している場所や屋外イベントなどへ福祉バイオトイレカーを使用し、ホームヘルパー等の有資格者や、ボランティアスタッフと一緒に身体の不自由な方へのトイレ支援活動をしております。

車いすユーザーや視覚障がいの方、高齢者など、身体の不自由な方はトイ

レを汚しても自分で清掃することが難しい場合があります、次に利用する方も清掃して使うことが難しく利用する事を諦めてしまいます。私達はそういった「トイレが汚くて使えない」などの問題を解決するため、トイレの利用の都度清掃を行い常に清潔なトイレ空間を提供しています。

また、必要に応じて排泄介助を行い、利用者とコミュニケーションを積極的に行い、利用しやすいトイレを提供できるように日々工夫もしています。身体の不自由な方も健常者と同じように外出を楽しんでもらえるよう、より良いトイレ環境を提供するため活動しております。

活動を始めたきっかけ

私達の活動に必要な不可欠な福祉バイオトイレカー。この車両は、警備会社で平成20年に開発・製造されました。

この車両が開発されたきっかけは、主に交通誘導などの業務をしている中、毎日の通勤などで工事現場付近を利用

する車いすユーザーに通行介助をして、コミュニケーションを図るうちに、障がいをお持ちの方がトイレの不便さを感じていることを知りました。

そこで、社会への貢献のひとつとして、日本ではまだ開発・製造されていない、車いすのまま乗降できるリフトが付き、移動ができる障がい者用トイレカーの開発にいたしました。

駅周辺の商業施設などの障がい者用トイレの現状を調査した際、汚れている場合が多く、掃除をしてまでも利用したくないと感じてしまい、清潔で安全なトイレを提供することが必要と思い、福祉バイオトイレカーを有償借出し、障がい者へのトイレ支援活動を行うことを始めました。

健常者は外出先で「トイレがあるのが当たり前」であり、一施設に複数のトイレがあるため、使用しようとした個室が汚れていても別の個室を使用できます。

また、急にトイレに行きたくなってトイレに困ることは普段あまりなく、気に留めずとも不便はありません。

しかし、障がいのある方や介助の必要な方が安心して利用できるトイレの設置はまだまだ不足しており、「あるのが当たり前」のトイレがない状況で

す。どの場所に行っても、常にトイレの場所を把握していないといざという時に困ります。事前にトイレの場所を調べていても、いたずら防止などで施錠されていたりと利用できるトイレがない場合もあります。大きな屋外イベント会場に障がい者用トイレがない、もしくはトイレの数が少ない場所は、トイレを借りるために会場を離れ、駅周辺まで戻ったりもします。移動に時間と労力が必要とするため、また会場まで戻る気力はありません。そのため利用できるトイレがない場合は外出を諦めるか、おむつ着用になってしまい、外出すること自体が億劫になる原因と考えます。

当事者の外出を促進し、誰もが笑顔で「トイレ」を使用し、優しさが次の人の笑顔につながる活動を広げることにより、より多くの障がいのある方や高齢者の方々が外出先で活動し、生活のクオリティを高めることを目的とし、平成23年1月にNPO法人を設立しました。

活動の実績

法人設立後、神奈川県内を中心に活動を行ってきました。

まず、福祉バイオトイレカーを利用

したトイレ支援活動は前例がなく、この活動を知っていただくため、各地で無償にて活動を行いました。その際、利用者の声も併せて報告書を作成し、イベント主催者へ提出、次年度は予算計上いただけるようお願いをしてきました。その場では必要性を感じていただけのもの、翌年になると予算がないという理由から「既存の障がい者用トイレで充分」という回答がほとんどでした。

イベント主催者は健常者だけで運営されている場合が多く、障がい者の意見が反映されていないイベントがほとんどです。何十万と集客のある屋外イベントでは「当事者がほとんど来場しないので障がい者用トイレは不要」や「健常者の来場者だけでも混乱するのに、車いすユーザーが来場したら自殺行為」とまで言われたこともあります。当事者も健常者と共にいろいろなイベントを楽しんでいたきたいという一心で、健常者へ向け、障がい者のトイレ問題の提起や多目的トイレの使用を控えるよう啓発活動にも力を注いできました。

近年は神奈川県外のイベント関係者からもトイレ支援の依頼がくるようになり、少しずつですが、障がい者のト

イレ問題が認知されつつあると実感しております。

利用者・見学者からは「〇〇のイベントにも来てほしい」や「このイベントには毎年トイレカーが来てくれるので安心して参加できる」などの他に「悪臭もなくキレイでスタッフさんがいるので安心して利用できます」との声もいただいております。

また、普段は屋外イベント等で身体の不自自由な方のトイレ支援を行っておりますが、震災が発生した際は被災地でトイレ支援を行っております。東日本大震災では、復興のために多くのボランティアの方が集まり、トイレの無い場所での作業で特に女性の方は大変不便な思いをしているとの話を聞き、少しでも手助けができればとの思いから約1年7か月の間、女性ボランティアの方のためにトイレ支援を行いました。

さらには記憶に新しい熊本地震では身体の不自由な方が集まる避難所へ行き、身体の不自由な方はもちろん、施設関係者や近隣住民の方にもトイレ支援・シャワー支援活動を行い、「地震がおきてから10日ぶりにシャワーを使い頭が洗えました。」など皆様に喜んでいただきました。

奨励賞を受賞して

今回受賞したことにより当法人の大きな実績と自信に繋がりました。

副賞は、いままで予算がなく福祉バイオトイレカーの設置が叶わなかったイベントへの設置費用の補助としてご利用させていただくとともに、展示会にも積極的に参加し、福祉バイオトイレカーと当法人の活動を幅広く知っていただく機会を増やすことにより、より多くの障がい者や高齢者の方々がトイレの心配をせずに屋外での活動を楽しめ、生活のクオリティを高めるひとつになることを望みます。

そのほか、ボランティアに参加される方々の熱中症対策として、夏場の制服を薄手で風通しの良いものに新しく購入し、当法人のパンフレットも設立当初に作成したものから新しいものへ作り直す費用として利用させていただきました。

今後は、まだまだ未熟な私達ですが、利用者がトイレを必要とされる場所、必要とする方達の声を聞き、トイレ支援活動が拡大できるように、当事者の方々に寄り添えるように活動していきます。

また、2020年に開催される東京五輪・パラリンピックで、神奈川県も

藤沢市・江の島がセーリング会場となります。観戦される方も多く来場すると思いますので、地元・神奈川県で活動できることを目標とし、誰もが楽しめる笑顔で終わる東京五輪・パラリンピックになるよう、トイレ環境の整備のひとつとなるように、活動したいと思っております。

<団体概要>

【団体名】 特定非営利活動法人 やさしくなろうよ
【活動開始時期】 2011年1月18日
【代表者】 大畑 裕
【会員数】 11人(平成28年10月)
【H P】 <http://yasashikunarouyo.jp/>
【活動地域】 神奈川県内、東京都、静岡県、千葉県等
【活動概要】 イベント会場に福祉バイオトイレカーを設置し、障がい者やシニア層を対象としたトイレ支援活動

【ボランティア活動奨励賞】

邦楽を通じた感性豊かな子ども達の健全育成

こども邦楽育成会



活動の様子

小学校での体験授業と訪問演奏（年4回）。

初めて尺八や箏（そう）を体験して興味を持つ児童が多く、受け入れ事業として夏休み・春休みに体験型邦楽教室を実施中です。

2、コンサートの実施…小・中・高校のボランティア学生の協力を得て開催。春休み邦楽教室&コンサート（3月）、4歳児からの箏の体験教室（5月）、夏休み邦楽教室&コンサート（8月）の実施。コンサートでは小さな子ども達にも楽しめるように、「となりのトトロ」、「日本の民話」などを演奏に取り入れています。

3、コミュニケーション…小・中学生のボランティアと共に、デイケアセンター、老人ホームでの訪問演奏や市主催の各種イベント参加など地域とのコミュニケーションを大切にしています。

さらに、御殿場市の神山復生病院では会員による演奏会を毎月行っています。

また、赤十字ボランティア部会の依頼を受け、箏・尺八・三味線の邦楽演奏と語りとのコラボレーションによる「民話・鶴の恩返し」を披露。本演奏はたいへん好評をいただき、是非、小学校の生徒にも聞いてもらいたいとの依頼を受け、秦野市立上小学校での体験授業と演奏会に輪が広がりました。

ば成しえないなら、少しづつ力を出し合って楽しみながら成し遂げる。また、会館職員の方々の姿勢を学びながら、次世代を担う子ども達と歩んできました。

活動を始めたくっかけ
伝統音楽と出会い、継承していく若い力を育てる勉強の場を提供したい、子ども達に日本の伝統音楽を伝えたいという思いを持って活動しています。

昭和57年に神奈川県立青少年会館（現はだのこども館）の職員の方に薦められて、『こどもお箏教室』を開き、さらに箏の他に三味線、尺八を加え、『こども邦楽教室』として現在に至っています。

邦楽教室の教室生は、こども邦楽合奏団「KIDS Koto」として活動しています。

平成17年に、もっと多くの子ども達に邦楽を伝えたいと、活動を続けていた仲間たちとボランティア団体として、こども邦楽育成会を設立し、定例事業として『こども邦楽教室&コンサート』を実施しています。

青少年会館の時代に会館の祭りである『師走祭』でのイベント参加や演奏会など、大勢の人と力を合わせて一つの事を作り上げる楽しさを経験しました。

現在は、はだの市民活動団体連絡協議会主催の『チャレンジ！THEボランティア』に参加した学生を受け入れ、夏休み・春休みの『こども邦楽教室&コンサート』を実施しています。

若い力が集まり、失敗しながらも前に進んでいく欲び、誰かがやらなければ

『邦楽教室』では、4才からの児童を受け入れ、音楽の基礎を楽しみながら学べるように、こどものためのソルフェージュ・リズム遊びを取り入れ、

主な活動内容

こども邦楽育成会は、こども達が健康やかに成長することを願うとともに、日本の伝統文化である邦楽の普及活動のため、主に三種類の活動に取り組んでいます。

1、人材育成と体験授業…こども邦楽教室（毎週日曜日実施、平日午後放課後不定期実施）

箏の合奏に進みます。

また、公民館で「こどもは5時までですよ。」と、家に帰されていたこども達の寂しそうな様子をみて、こどもたちの居場所を作るために、平日の放課後教室も始めました。より多くのこども達に音楽に関わってもらいたい、こども達の未来が平和で豊かな社会であるようにと願い活動を続けています。

活動の実績

こども邦楽教室、小学校での体験学習指導、敬老会や老人ホームでの演奏等30年以上、ボランティア活動を継続して行っています。

秦野市広報、タウンニュース紙などの地元メディアで、こうしたユニークな活動が紹介されています。

また、10周年の活動を記念して、昨年開催した『こども邦楽育成会・10年の歩み展示とコンサート』では、神奈川県新聞、他の紙面に掲載されました。紙面を見た方々より、箏や三味線を寄贈して頂き小学校の体験授業、邦楽教室で活用しています。

ほかに、国際交流会での演奏や邦楽体験の手伝いをするなど、日本の楽器を紹介するためのこども達の活動の場も広がってきています。

ボランティアに参加した子ども達の

中には、ボランティアを繰り返して、継続して参加している子もいます。邦楽教室の修了生達がボランティアとして団体の活動を支えており、こども達と共に活動を続けていることが、「こども邦楽育成会」の特徴といえます。ホスピスや老人ホームの演奏では、ベッドに横たわっていた方や、車椅子で寝ていた方が演奏に合わせて唇を動かしたり、微笑んでくれたりと、私達に勇気を与えてくれます。そして、これからの活動を支えてくれています。

奨励賞を受賞して

長い年月の地道な活動を評価していただき、感謝しています。

春休み・夏休みに実施する『こども邦楽教室&コンサート』では、中・高校生ボランティア学生の協力を得て活動しています。幼児にも興味を持ってもらえるように、プロジェクター等を利用した演奏をプログラムに加えています。3歳児から「トトロの塗り絵」を描くことでコンサートに協力してもらいました。邦楽の演奏に合わせて塗り絵をスクリーンに映し出して鑑賞できるように工夫しました。今年の邦楽教室でも、乳児を背負ったお母さんが幼児と一緒に体験を楽しみ笑顔や笑い声が会場に響きました。祖父母やお父

さんと一緒、など、家族での参加も増え、「家族で邦楽に親しんでもらう」という、新たな目的に一步、近づきました。

奨励賞副賞は、楽器の調律や修理など、こども邦楽育成会活動のための土台となっています。

また、この受賞を励みに、次のステップに踏み出しています。邦楽を通じて多くのこども達の育成に携わってきたいという願いを実現するため、「ジュニア邦楽合奏団」設立に向けて歩み始めました。

大きな夢であるオーケストラとの協演の実現に向けて一步、踏み出します。

また、こどもたちに最高の勉強の場を提供したいとの思いから、首都圏で活躍中のこどもの育成に意欲を持つ演奏家を招聘して指導を受ける邦楽教室を考えています。

邦楽を通して感性豊かな子ども達を育成し、ボランティア活動の大切さや楽しさに触れることで、ボランティアのすそ野の拡大を図り、思いやりの心を育て、こども達の未来が明るいものになるよう地域社会と関わっていきま

<団体概要>

[団体名] こども邦楽育成会
 [活動開始時期] 2005年6月1日
 [代表者] 小瀬村 公子
 [会員数] 10人(平成28年4月)
 [HP] <http://www.asahi-net.or.jp/~us2s-ksmr/koto/>
 [活動地域] 秦野市、二宮町、大磯町、開成町、御殿場市
 [活動概要] 小中学生を対象とした邦楽の普及活動や、ボランティアでの演奏会等の実施。



体験型邦楽教室の様子

【ボランティア活動奨励賞】

社会的に困難な境遇にあるアジアの人々に対する

生活基盤を確立するための各種事業

特定非営利活動法人 地球の木



保護シェルターの子どもたち (カンボジア)

学校や地域への出前講座、各海外プログラムに関する学習会、フィールドワークなどの国内活動も大切な活動の一部である。

に「ブランチ」が作られ、ここをそれぞれ拠点として活動していた。これが足下からの国際協力を実施できる元となり、地球の木の特徴ともなった。

活動を始めたきっかけ

1984年にアフリカで飢餓が起こった際、生活クラブ生協神奈川が1食カンパ運動を実施したことが地球の木の誕生のきっかけだった。学習を重ねたところ、お金を支援するだけでは解決はできない、世界の構造的な問題に出合った。この問題が自分たちの暮らしとも繋がっていることを知った。

活動の実績

設立当初、神奈川県内に国際協力団体は少なく、地球の木のメンバーはN GOについて学ぶため、日本国際ボランティアセンター(JVC)のスタッフに運営に関わってもらい、JVCのプロジェクト地を訪問することから始めた。

その後、ラオスで生活改善普及や森林保全の取り組みが始まり、森林と農業の支援は今も続いている。

生活クラブなどが開催した国際シンポジウムがきっかけとなって設立された「草の根援助運動」の紹介で、フィリピンのスラム街、タタロンへの支援も始まった。

その後、日本ネグロスキャンペーン委員会を通じてネグロス島の民衆農業創造計画などの活動にも関わった。

1991年、戦後日本の大きな転換点となったカンボジアPKO自衛隊の海外派遣に対し、「カンボジア市民調査団」を生活クラブが結成し、地球の木が中心となり、カンボジアのJVC

主な活動内容

地球の木は、支援対象地域をアジアの途上国とし、弱い立場に置かれた人々が自ら力をつけて、困難な状況を改善し、住民主体の地域づくりを行うように、現地のパートナーと協力しながら支援を行っている。

また、海外プログラムを通じて見えてきたことを日本社会に伝え、日本社会で起きていることを支援地の人々に

効果的に発信していくことで、資金援助にとどまらない「相互自立」の考えに基づく独自の国際協力活動を実践している。
現在、海外支援プログラムは3つある。
ラオスの森林の自主管理や農業生産力の向上のための「森林と農業プログラム」を日本国際ボランティアセンターを通して支援している。
ネパールでは、少数民族が多く住む村の教育と収入創出の向上に取り組む「幸せ分かち合いムーブメント」を展開している。

カンボジアでは、家庭内暴力やレイプの被害者のための「保護シェルター支援」を実施している。

緊急復興支援としては、ネパール大地震の被災者に対する医薬品の提供、シェルターや補助教室の建設、職業訓練を実施している。この他、相互の自立のための交易事業として、カンボジアのフェアトレード品の生産・販売を行っている。

カンボジアでは、家庭内暴力やレイプの被害者のための「保護シェルター支援」を実施している。
緊急復興支援としては、ネパール大地震の被災者に対する医薬品の提供、シェルターや補助教室の建設、職業訓練を実施している。この他、相互の自立のための交易事業として、カンボジアのフェアトレード品の生産・販売を行っている。

国境を超えた地域と地域をつなぐ住民同士の連帯を築くため、生活クラブの支部活動に沿って神奈川県各

の活動地を視察した。

帰国後、軍隊ではなく農村支援をと、JVCを通じての井戸掘り支援やコマ銀行支援などが始まった。このようにして、先進NGOから支援のあり方や国際問題などを学んでいった。

日本のNGOを通じた国際協力が中心だったが、1997年に転機が訪れた。

日本の生協運動について学ぶために神奈川を訪れたニルマラさんという女性との出会いから、ネパールのNGOとパートナーシップを結び開始したが、少数民族タール族のための識字教室である。この活動は12年間続き、識字教室から貯蓄グループができ、それが協同組合に発展し、いくつもの活発な協同組合が誕生した。

生活クラブでは、フィリピン・ネグロス島産のバナナに取り組んでいた。そのバナナを地球の木の運営委員が班を回って説明する場があった。より効果的に伝え、考えてもらうための道具が必要だった。バナナは不公正な社会の仕組みについて考える恰好の材料であり、開発教育協会や教員、学生などの協力を得て、バナナを題材にした開発教育教材「マジカルバナナ」を1999年に完成させ、販売した。

教育関係者でなくNGOがこのような教材を作るのは初めてであり、その後多くの教材がNGOによって制作されるようになった。「マジカルバナナ」は改訂を重ね、今でも基本的な教材として学校現場などで使われ、ロングセラーとなっている。

地球の木では社会教育活動の一環として、当教材や新しく考案したワークショップの出版を実施している。

フィリピンやネパールへのスタディツアーも行ってきた。授業を受けた生徒たちやスタディツアー参加者の中には、進路を決めるきっかけになったという声も多く、意義ある活動であると考えている。

奨励賞を受賞して

奨励賞受賞は大きな元気づけになり、副賞は海外プログラムの充実と25周年記念事業に役立たせていただいた。

2015年度に策定した3カ年計画では、地球の木の標語「分かち合うくらし」の浸透をはかるべく、ラオス、ネパール、カンボジアの3つの海外支援プログラムでテーマを意識した活動を展開していくことを決めた。

海外よりも国内に関心が集まるようになってきている今、より多くの人に世界

に目を向けてもらうべく、参加しやすい企画を考案し、実施していくことが使命であると考えている。

ネパールでは大地震のため活動が滞っていたが、ようやく動き出し、教師トレーニング、高校の校外学習や作文コンテスト、植林活動が再開された。

今後は、震災後の中期計画を立てるための住民参加型の状況調査を行う。カンボジアの保護シェルターには2016年10月に訪れ、被害にあった子どもたちの状況の聞き取りを行った。

25周年記念行事として、多彩なプログラムを実施している。2016年5月の講演、7月ラオスお話し会、9月にはネパールからパートナーのカマル・フヤル氏を招聘した。カマル氏の講座では緊急時でも効果を上げた参加型の組織作りについての話を聞き、ワークショップでは、人々の声を拾い上げ、課題解決に当たる手法を体験し、約200人の参加者が多くの学びを得ることができた。

今後は、次世代の人材育成に力を入れ、ネパールでもプログラムと連携できるようなフェアトレードを検討していきたい。

<団体概要>

[団体名] 特定非営利活動法人 地球の木

[活動開始時期] 1991年

[代表者] 丸谷 士都子

[会員数] 704人(平成28年9月)

[HP] <http://e-tree.jp/>

[活動地域] ラオス、ネパール、カンボジア、神奈川県内

[活動概要] アジアの途上国を対象に、住民主体の地域づくりを行えるように、現地のパートナーと協力しながら支援を行っている。



完成したシェルターの前で（ネパール復興支援）